白幻の後追

矢野 新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白幻の後追

【Ｎコード】
Ｎ７９９３Ｃ

【作者名】
矢野　新

【あらすじ】
風の民フェータルは額に刻まれた神印の意味を知る為、世界を巡っていた。しかし、神は既に滅んでいたのだった。風の幻の続編。

1．未了の魔女

湖の側にある神殿を見上げ、目深くフードを被った男は首を振った。
「ナタ」
神殿はすっかり寂れ、廃墟と化していた。
「…ここも駄目みたいだ」
ナタ、と呼ばれたものは悲しそうに耳を伏せる。見た目はまるで犬のようだ。しかし、尾が二岐に分かれている。
「やっぱり何も思い出さないか…フェータル」
フェータルは頷く。
「何も」
フェータルはフードを頭から下ろし、もう一度神殿を見上げた。日の光に当たって反射したのは白銀の髪だった。
「…行こう」
フェータルは神殿を後にした。
最後に一度だけ振り返った。

「前に一度さ、フェータルが〝ここに来た事がある〟って言ってた所あるだろ？そこにもう一度行ってみようよ」
ナタが二岐に分かれた尻尾を揺らしながらそう言った。
「ああ―…」
フェータルは浮かない顔だった。最後の頼みが駄目だったのだ。無理も無い。
「フェータル…」
ナタはそれ以上何も言えず、足の間に鼻を埋めた。
と、ナタの両耳が立ち上がった。
「…何か来る」
フェータルが剣を取り、立ち上がった。ドドドっ、と何か重い物が走るような地響きが、はっきり聞こえて来た。

「フェータル、あれ！」
ナタが尾で示したのはこっちに向かって走って来る紅い髪の人物だった。地響きが追っているのはその人らしかった。
「ナタ、あの人を頼む」
「分かった」
言うとフェータルが走り出し、音のする木立の中へと入って行った。
紅い髪の人物が後ろを振り返った時、地響きの正体が月下に現れた。
それは、大きな角を額と鼻筋から生やした巨大な獣だった。全身が鎧みたいな物に覆われている。
「はぁ！！」
フェータルが跳び、剣を振り下ろす。長い銀の髪が月光を弾いた。
が、その硬い身体に剣が弾かれた。
「その身に深き聖槌を下せよ　ヴェグダ！！」
フェータルが地に着くと同時に、剣を地面に突き刺した。と、獣の足元の地面が割れる。
「ゴアアァ！」
獣が足を取られ、倒れた。地響きと共にフェータルが、獣の足の付け根を狙って剣を切り付けた。
「ウグアァ…ッ！！」
獣は動かせなくなった足を懸命に動かそうと、ジタバタした。
「ナタ」
ナタの方を振り返った時、獣に追い掛けられていた人物と目が合った。
「―シアン？」
（シアン…？）
紅い髪の人物ははっとしたように、自分の口を手で押さえた。
「あ…ごめんなさい。今、どうしてか」
そこでフェータルははっとなった。
「あ、あぁ…大丈夫か？」
「えぇ」

その紅い髪をした人物はティアと言い、エルフだと名乗った。
「私は自分が何なのか探しているの…あなたは？」
「俺も…同じ」
「えっ？…そうなの」
しばらく沈黙になった。
「俺は…ある時から違和感を感じ、村を出た。自分の、この額に刻まれた印によって何かを封印された事が、どういう事なのかそれを知る為に」
フェータルが額当てを外すと、その額に何か模様が刻まれていた。
「―…それって神文字…？」
「そうだ」
フェータルは額当てを着けた。
「…何故、そんな物が」
「……」
ティアは白銀の髪をした目の前の人物を、先程とは違う目で見た。
（神々に封印される程の力…？そんな馬鹿な）
ありえない。
白銀の髪。
澄んだ青い瞳の色。
人のようで違う容姿。
ん？
「あ！あなた…もしかして風の民？」
「…そうだ」
そう答えたフェータルの顔が少し歪んだ。
「風と共に生き、風に愛されし種族だと聞いたわ…」
「……」
「フェータル」
ナタが何かを訴えるような顔で、フェータルを見上げた。
「自分の村にはしばらく帰って無い」

フェータルは一瞬目を閉じた。その一瞬の間にどんな思いが行き交ったのか、ティアには測り兼ねた。
「さっきの奴らには気をつけろ。まだこの辺りをうろついているかもしれない」
「…えぇ」
フェータルは立ち上がった。
「行こう、ナタ」
二人は再び旅立とうとした。
「待って」
ティアが引き止めた。
「未了の魔女って知ってる？」

フェータルはその一言で、ティアと旅を共にする事にした。
「未了の魔女とはどういう者なんだ？」
「その地にいて五百年生き続けてるって噂よ」
「五百年…」
もちろん、人間は五百年も生きられない。
「それは人間なのか？」
「さぁ？人間ってそういうの好きじゃない」
荷馬車の車輪ががたんっ、と跳ねた。
未了の魔女はここから西にあるティリドの町にいると言う。翌日、偶然通りかかった荷馬車にティリドの近くまで乗せてってもらう事にした。
「昨日どうしてあんなのに追い掛けられていたんだ？」
「私…空飛ぶのが下手なの。昨日あのでかい奴の巣に落ちてしまって…」
「……」
フェータルは思わず遠くを見遣った。
「そういうあなたこそ風の民でしょ！？飛べるの？」
「…無理なんだ。怖くて」

「怖い？」
ナタの頭を撫でていたティアの手が、止まった。
「それより、魔女に聞いて分かると思うか？」
自分の額を押さえながら、フェータルはそう聞いた。
「人間達の方が宗教的な繋がりは強いわ。…神はもうずっと見てないけど」
「て事は前はいたのか？」
「えぇ。私達は毎日拝んでいたのだけど、ある日突然神像が割れてそれ以来…」
フェータルは顎に手を充てた。
「やっぱりそうか…」
「やっぱり？」
フェータルが顔を上げた。
「今まで神殿、聖地と呼ばれた場所を見てきたけれど、どこも寂れていたんだ」
「…神は既に滅んだって事？」
「……ああ」
それきり沈黙になった。

途中、ティリドへ行く別れ道で荷馬車から降ろしてもらい、礼を言って再び歩き出した。
「……」
「フェータル」
ナタが、フェータルの足元を歩きながら声をかけて来た。
「何だ？」
「その魔女に会ったら何か分かるのかなぁ」
「…さぁ」
その時、数歩先を歩いていたティアが振り返った。
「急げば今日中にティリドに着けるわ。急ぎましょう」
「あぁ」

町に着くと、大きな通り沿いにある酒場に入った。
そこである一人の踊り子を紹介された。
「あなた達が来るのを待ってたのよ」
「じゃあ、あなたが…」
魔女と言うから年寄りを想像していたが、見かけは若い娘だった。
「私はモア…これは魔女の名よ。白銀の髪のあなた、ずっと昔大きな事を成し遂げたわ」
「はぁ！？」
突飛も無い話に、フェータルは思わず腰を浮かしそうになった。
「正確にはあなたと同じ髪の小さな子供が、ね」
（子供…？）
「フェータルは一体何をしたの？」
ティアがそう聞いていた。
「それは私にも分からないわ」
「…じゃあ何故封印が？」
「多分…それは隠す為だと思う」
「何から？」
「敵対するものから」
「敵？」
フェータルは額に手を充てた。
「ところで赤髪のあなた…ティアと言ったわね。その胸元にある小さな輝きを見せてもらっても？」
「胸元…？」
ティアははっと気付き、首からかけていたある物を取り出した。
フェータルはそれを見た瞬間、驚きに目を見開いた。
（あれは―）
「これは人が作ったものじゃ無いわ」
「えっ」
ティアが驚いたようにモアを見た。

「輝きが全然違うもの」
「あの、これは一体…」
「……神々が世俗を憂い、遺したもの…」
長い沈黙の後、魔女が口を開いた。
「えっ！これが？」
（違う。これは神が自分達の都合で落とした物だ…）
フェータルは胸元にある物をぎゅっと掴んだ。
その時モアと目が合い、先に目を逸らしたのはフェータルだった。
「モア」
その時、踊り子の仲間がモアを呼びに来た。
「ごめんなさい。行かなければならないわ」
「あの、待って！」
モアが振り返った。
「…私は一体何なの…？」
すると、魔女は艶然と微笑った。
「それは私よりあなたが知っている筈よ」
魔女は行ってしまった。

「フェータル！どうだった」
外で待っていたナタが、出て来たフェータルに駆け寄った。
「……」
「フェータル？」
「結局、何も収穫無しか…」
ティアがため息と共に吐き出した。
「え…何だ。がっかり」
ナタが耳を伏せた。
「フェータル」
ティアがフェータルを呼ぶと、フェータルが振り返った。
「昨日は助けてくれてありがとう。何もお返しにならなくてごめんなさいね」

「…いや」
ティアが別れの挨拶と、差し出した手をフェータルは引っ張った。
「つけられてる」
「―え…っ」
耳元で低くそう告げられ、ティアは思わず視線だけ動かした。
「余り見ない方がいい。後で町入口で合流しよう」
「え、えぇ」
「ナタ！」
二人は別々に別れて走り出した。追者が慌てたように一瞬踏み止まったが、ティアを追った。
「ナタ、先に町の入口に行っててくれ」
「うん」
フェータルはそう言うと、屋根上に跳んだ。
そのまま、道沿いに屋根上を走る。
「ヒィリフ」
フェータルが何か唱えると、追者の前に風が巻き起こった。
「がっ！」
背後から斬りつけ、追者は気絶した。
「フェータル！」
ティアが振り返る。
「早くこの町から出た方がいい」
「えぇ」

「フェータル！」
町の入口に着くと、ナタが道脇から飛び出して来た。後ろから何人か追って来る。
「―しつこい！」
ティアがエルフ語で毒づいた。
フェータルが町外れまで来ると、振り返った。
「フェータル？」

「道なき標を追に化せ―ウルグ！」
地面の土が目の前に大きく盛り上がり、壁となった。
しかし、すぐに掻き消される。
「魔動師！」
人間達に追い付かれ、囲まれた。一人が斬り掛かってくる。
「―くっ…」
「おい大事な商品なんだ。傷を付けるなよ」
人間達の中で一人、ローブを羽織った者が嫌な笑いを浮かべながら言った。
「おっと。術を使おうなんて思うなよ」
フェータルは構えていた手を下ろす。素早くナタの方を見た。
ナタが頷く。
「グウゥゥ―！！」
「何だ？」
見ると、ナタの体が大きくなり人間達に襲い掛かった。
「うわぁ！」
「―ナタ！」
ナタはもう一人を押し倒し、ティアの服の袖を引っ張る。
「フェータル！？」
「―今この地に渇る掌中に表せよ　ジルフィリガ！」
フェータルが地に手を突くと、地面が地響きを起てて揺れた。
「何だ地震か！？」
人間達が慌てふためく中、動師に向かってフェータルは斬りかかった。
「何っ？うわあぁー！」
フェータルが魔動師の喉元に剣を突き刺すと、魔動師が気絶した。
「逃げたぞ！」
茂みの中に走って行くフェータルを見た一人が叫んだ。
フェータルは空に向かって飛んだ。
（―…まただ）

今、頭の奥で何かが霞んだ。
（何かを思い出そうとしてるのか…？）
フェータルには何も分からなかった。

「もうあの町には行けないわね…」
「……」
フェータルは答えなかった。
「それでも私は旅を続けるわ」
ティアはそう告げる。
「…あぁ」
「ねぇ、私もフェータル達について行っても構わない？」
ナタが頭を上げた。
「でも俺達と一緒に来ても何も―」
「そうかもしれないけど、でも私…あなたと初めて会った気がしない」
（それは俺も感じた…）
「それに今の治世は知ってるの？」
「…いや」
「今、神教を復興させようと各地で教会や寺が建てられているわ。その主になっている所が―神都ヴィンツェよ」
「ヴィンツェ？」
ティアが頷く。
「そこに行けばあなたの額に刻まれた印の意味も分かると思うわ」
二人はしばらく黙ったままだったが、フェータルが諦めたようにため息をついた。
「―明日夜明けと共に出発だ」
「えぇ」
ティアが嬉しそうに答えた。

2．二つの神遺

二人と一匹は、神都と呼ばれるヴィンツェを目指して旅立った。
「え～こんな所渡るの～？止めようよ～」
ナタが尻込みしながら後ずさる。
「でもここ以外だと遠回りしないといけないし…」
目の前には、川に渡された細い橋があった。雪解けで水かさが増えて奔流と化していた。
橋と言っても柵も手摺りも無い、補強された木の板が渡されてるだけであった。
流れが急激で、足を踏み外せば飲み込まれる。
と、フェータルがナタを抱え上げた。
「しっかり捕まってろ」
「う、うん…」
「……」
それを後ろで見ていたティアは、不思議に思った。
（あの二人…どういう関係なのかしら）
主人と従獣という感じにも見えない。ナタのような獣も見た事が無かった。
「ティア？」
ナタが、ティアが渡って来てない事に気が付き、フェータルの肩ごしから声をかけてきた。
「え、えぇ…」
ティアが橋の中央辺りに来た時、雪解け水の急激な流れに、ティアがあっという間に飲み込まれた。
「ティア！」
ナタの叫び声に気が付きフェータルが後ろを振り返ると、ティアが流されていくのが見えた。
（何これ…息が出来ない……）

ティアは必死に岩に掴もうと手を伸ばすが、滑って掴め無い。
その時、誰かに腕を引っ張られた感じがした。
「大丈夫か」
気が付くとフェータルに引っ張り上げられていた。
「え…えぇ」
咳込みながらティアが答えるのを聞いて、フェータルはそのまま空に浮く。
「しっかり捕まっていろ」
「うん…」
（―あれ？前にもこんな事…）
しかしそんな訳無いと、ティアは首を振った。
岸に着いてティアが呼吸を整えていると、ナタが駆け寄って来た。
「ティア大丈夫？大分流されたよ」
「フェータルのおかげで助かったわ…あ！」
「どうしたの？」
ティアはフェータルを見た。
「ごめんなさい…空飛ぶの怖いと言ってたのに」
すると、フェータルは自分の着ていた外套を脱いで、ティアに渡して来た。
「気にするな。それより着替えてこい。その間に火を起こしておく」
「…ありがとう」
そう言ってティアはそれを受け取り、木陰に入った。
「どうしたの、やけに優しいんだな。いつもそうなのか？」
ナタがニヤニヤしながら言ってきた。
「違う…そんなんじゃない」
フェータルは立ち上がり、岸辺に沿って何か探し始めた。

「最近…時々額が痛みだすんだ。まるで何かを思い出すかのように」
その晩、フェータルが額を抑えながら言った。
「思い出す？」

ティアが不思議そうに返した。
「それが何なのか分からないんだ。さっき空飛んだ時も…」
「それって…思い出すのが怖いから飛びたく無いって事？」
「……」
「―何を恐れているの」
ティアが口調を変え聞いてくる。
フェータルがじっと、ティアを見つめてきた。
「なっ、何？」
「…―いや、何でも無い」
「？」
ティアは思わずナタと顔を見合わせた。

次の日、川沿いに上流を目指して歩き出した。途中山道を見つけ、山を登って行く。
「こんな所から登って大丈夫なのか？」
ナタが不安げに尋ねてくる。
「この道沿いに行けばあの山の麓に着ける」
フェータルが、えらくはっきりと答える。
「あ、そうか。風が教えてくれるんだよね」
「風？」
一番後ろを着いてきながら、ティアがそう言って辺りを見回す。
「そうだよ。フェータルは風の声が聞けるんだ」
「でも余り風は吹いて無いみたいだけど」
「…大丈夫だ」
後ろを振り返ってそうフェータルが言った。
（別に彼の言う事信じられない訳じゃ無いけど）
この崖道がきついせいかもしれない。
「ふぅ…」
崖を登りきると、一息ついた。
と、向こうに大きな山が見えた。所々雪が積もっていた。

「最近雪なんて降ったかしら」
「何日か前に降ったのが残ってるんだ」
フェータルがそう答えてくれた。
「へぇ～すごいわね」
「ああ。俺達には敵わない」
ティアはそんなフェータルの後ろ姿を見た。
（……）
「どうしたの？」
ナタが不思議に思ったのか、そう聞いてくる。
「えっ、何でも無いわ」
（ただ、彼もそんな事を思うんだ）
そう思っただけだった。

「大分寒いわね…」
外套の上からでも寒気が伝わってくる。二人と一匹は、少しの休憩を取ってから再び旅立った。
「もっと進んだら寒くなるよ」
ナタが、フェータルの外套の胸間から顔だけを覗かせながらそう言った。
「…嫌な事言わないでよ」
山の麓に着くと、鬱蒼とした森が広がっていた。
「ナタ寒くないか？」
「大丈夫だフェータル。ここはあったかいよ」
ナタがフェータルを見上げながら答える。
（うっ、羨ましい）
ティアがそんなやり取りを見ながら震えた。
山道を登って行くとやがて、頂上に近付いた。
「もう頂上かしら」
「あれ…山が」
ナタが何かに気が付いた。

「伏せろ！」
フェータルにいきなり言われ、戸惑いながらもティアは頭を伏せた。
山の向こうから黒い塊みたいなものが、段々と近付いてくる。
「何あれ…霧？」
「あれは魔物だ」
「えっ」
ティアが思わずフェータルを見ると、頭上を魔物達が飛んでいく。
それも数数え切れ無い程。
「どうしてあんなに…」
「……」
フェータルは立ち上がり、再び歩き出した。
「フェータル」
ナタが後を追う。

翌日の昼頃にやっと山を下りた。
林道を通り、そのうち日が落ち始め野宿する事になった。
湖の辺に荷を下ろすと、一息ついた。
「さすがに足が痛いわ」
「もう腹ペコだよ～」
ナタがその場に倒れ込む。
「御飯の用意をしよう」
フェータルがそう言って用意を始める。
（一人だとこうも行かないわ…）
自分一人だと簡単に済ませる時もあるのだ。
「フェータル？」
晩御飯を食べていると、ナタが不思議そうにフェータルに呼びかけた。
「あ、あぁ…悪い。今日はもう寝る」
言って横になってしまった。
「…？」

ナタが耳を伏せる。
ティアは不思議に思ったが、口に出さないでいた。
夜中ふと目が覚め、見張り番をしていたフェータルがいない事に気が付いた。
（何処に行ったのかしら？）
ナタは隣で眠っていた。
フェータルを捜しに湖の辺に沿って歩き出した。
しばらく歩いてると、フェータルが湖の辺に立っていた。
「眠れないのか」
しばらく見ていると、フェータルが声を掛けて来た。
「―あなたこそ」
フェータルは再び湖面を見た。
「何故、自分はここに存在できるか、考えた事があるか」
突然の質問の意味に答えられず、ティアは言葉に詰まった。
「ここ？」
「この世界、シアセアだ」
「……」
「神に見離されたならこの星は生きて行けない」
フェータルは正面を見たままだ。
「シアセアはエネルギーが枯渇し、いずれ滅びる。神によって存命した世界はその恩栄を受けられなければ、小さな物さえもこの世界で生きてはいけない」
「ここはこんなにも綺麗なのに」
ティアは静かな湖を見つめた。
「前言ってたわよね。神はもう滅んだって」
「あぁ」
「それは何故？人間達が信仰を失った訳でも無い。私達だって恵みを忘れた訳でも無い」
「……」

「もしかして過去に何かあったのかも」
「例えば？」
いつの間にかフェータルが側に立っていた。
「…魔女があなたが昔何かしたと言ってたわ」
ティアはフェータルの瞳を見た。吸い込まれそうだった。
「ティア…」
ティアは心臓が跳ねるのが分かった。
（初めて名前を呼ばれた…）
フェータルの目が細められる。と、その時体を引き寄せられ抱きしめられた。
（―えっ…）
「フェータ…」
抗議しようと顔を上げた時、唇を塞がれた。
そのまま体ごと強く押し付けられ、ティアは息が出来ない程だった。
と、体を離され息が出来るようになった。
「これは貰って行く」
見るとフェータルが、ティアの首に掛けてあった物を手に持っていた。
「はぁ…」
フェータルが背を向け、歩き出そうとする。
「待って…何なのそれ……」
フェータルが立ち止まった。
「…知らない方がいい」
それきり後ろを振り返る事はなかった。

「ホープ、早く」
ホープと呼ばれた者が顔を上げると、笑顔を浮かべる。
「待てよ。ピュア」
名を呼んだ相手を優しく引き寄せ、後ろから抱きしめた。
ピュアがホープの毛に覆われた手に、自分の手を重ねる。彼らは獣

の顔をした半獣―獣人と言われる種族だった。
「早くしないとまた怒られるわ」
笑いながらピュアが振り返った。ホープの手に自分の白い手を重ねたまま、その手に軽くキスを落とす。
「別に構わないさ」
と、ピュアの猫のような耳がぴっ、と起った。
「いけない。急がなきゃ」
二人は急いで緩やかな丘を下る。
「えっ」
ピュアが前方を見て声を上げた。それと共に鼻をつく匂いが流れてくる。
「―社が！？」
「急ごう！」
社の方から煙が上がっていた。

「お母様！」
ピュアとホープが社の道を駆け登って行くと、前から白い毛並みの獣人が他の獣人と共に駆け下りて来た。
「エルミナ様、何が起こったのです」
ホープが一礼して前に進み出る。
「社から火が上がり、今村の者達が火を鎮めています。ピュアはここから離れなさい」
「どうして社から」
「それなら人手が要りますでしょう。ピュア、エルミナ様と村へ行って村長の所へ」
「ホープ！」
ピュアが止めるのも聞かず、ホープは行ってしまった。
ホープが社の前に着くと、火を消そうと数人が走り回っていた。
「―！何だあれは」
煙がまるで生き物のように、ゆらゆらと揺れた。

《―見つけた》
その煙に紅い二対の瞳が揺らめいた。
（―？）
と、その煙がホープに襲いかかって来た。
「！！」
ホープは咄嗟に腕で庇ったが、煙はホープの体を擦り抜けただけだった。
「何だ貴様！」
煙はふっと、その場から消えた。
「―！？」

「ホープ！」
ピュアが心配そうに駆け寄って来た。
「火は」
エルミナが不安げに尋ねてくる。
「鎮火しました。みな、その内に戻って参ります」
「そう。よかった」
「何か嫌な予感がします」
エルミナとピュアはホープを見る。
「我々のあずかり知らぬ所で何か起こっているのでは」
エルミナとピュアは顔を見回せた。
「何故社から火が上がったの？」
ピュアが聞いた。
「…分からない。だが、何か嫌な予感がするんだ」
「これは誰かの陰謀かもしれない、という事？」
エルミナの耳が震えた。
「まだ、核心とまでは行きませんが」
「……」

その日の晩、ピュアはなかなか寝付けなかった。

社は全焼した為立て直しに決まったが、立て直しの為の木材が足りなく、来年まで持ち越される事になった。
（ホープはああ言ったけど、私が巫女になるのを神々様は反対なさってるんだわ…）
ピュアは今度の巫女に選ばれ、社へと託宣を下される重役を担っていた。
（―お母様…ごめんなさい）

次の日、ホープがピュアの家を訪ねてきた。
「今―何て」
「この村を出て原因を突き止めに行く」
ピュアは目の前の恋人の顔を、信じられ無い気持ちで見つめた。
「どうして？村で起こった事でしょう？」
「確かに」
ホープはピュアから視線を逸らした。
「しかし、社から火が上がったのはただの事故じゃないんだ」
「どういう事？」
「…無用な混乱を避ける為あの場にいた者は誰も言わないようにしてたが、社の火は只の火ではなかったんだ」
「えっ」
ピュアの目が驚きに見開かれる。
「だから何が起こってるのか、確かめに行く必要がある。ピュア、エルミナ様によろしくと伝えといてくれ」
そう言ってホープが行こうとした。
「いつ帰って来れるの」
ホープが振り返る。
「原因が分かればすぐにも帰ってくるさ」
「ホープ！」
しかし、ホープは振り返らなかった。
後に残されたピュアはただ、見送るしかなかった。

（一体、何が起こっているの…？）
空を見上げてみたが、そこには只いつもと変わらない空が広がっているだけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7993c/

白幻の後追

2010年10月10日03時09分発行